

---

# 君さえいれば

塔城 虚

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

君さえいれば

### 【Nコード】

N1384D

### 【作者名】

塔城 虚

### 【あらすじ】

そばにいて当たり前だと思っていた。守ってみせると誓った。それなのに……。かけがえないもののため、自身の幸せをなげうつ決意をした少年のお話です。

## プロローグ（前書き）

はじめまして、塔城 虚 と申します。

この作品が処女作となりますので、お見苦しい点多々あると思いますが、楽しんでいただければ幸いです。

## プロローグ

どうしてこんなことに……。

どうしてアイツがこんな目に遭わなきゃならない？

アイツが何かしたか？

もし神様つてのが居るんだとしたら、なんでアンタは、アイツを奪おうとするんだ？

アンタは、アイツがどれだけ楽しそうに笑つか知ってるか？

アイツが笑ってるだけで、何だって出来そうな気がするんだ。

そりゃあ、アンタから見ればアイツもちっぽけな人間の1人なんだろうさ。

でもな、俺にとっては他の何よりも大切な奴なんだよ。

なんでアイツなんだよ。

世の中には救いようのない奴らがたくさんいるだろ？

なんでそういう奴らじゃなくてアイツなんだよ。

アイツは……、俺の大切な……。

## 突然の悲劇

それは突然だった。

「ただいま。」

高校2年で帰宅部の俺、あいかわたける相川猛は放課後、いつも通りに帰宅した。

といつても、誰かがいるわけではない。兄弟はいないし、両親もこの時間はまだ仕事中的はずだ。

自室で私服に着替え、復習と宿題をさっさと済ませる。

別に俺が勉強熱心なわけではない。テスト前に一気に詰め込むような根性がないだけだ。毎日少しずつやれば1、2時間で済むが、時間が空けば余計時間がかかってしまうのだから、その日のうちにやっておいたほうが後で楽ができる。ただそれだけ。

やることを済ませた俺は、まだ読んでいなかった小説に手を伸ばした。

その時、デスクの上の携帯が鳴った。

ディスプレイには

みさわかえで  
『三沢楓』

の文字。

楓さんから？いったい何の用だ？

珍しい相手からの着信に首をかしげながら電話に出た。

「もしもし。」

「猛君！？いい、落ち着いて、これから言つことをよく聞いて。」

「どうしたんです？そんなに慌てて。」

「舞<sup>まい</sup>が事故に遭ったわ。」

・・・は？

「詳しいことまだ分からないけど、ひき逃げらしいわ。」

・・・ひき逃げ？舞が？

「県病院に搬送されたらしいんだけど・・・。猛君？聞してるの、猛君！？」

詳しい状況なんてどうでもいい。場所さえわかれば十分だ。

俺は、楓さんの呼びかけを無視して、家を飛び出した。

どこをどう走ったのかなんて覚えてない。

いつの間にか降り出した雨はすでに土砂降りになっていて、水たま

りに足を取られながら、ただひたすら病院を目指した。

自動ドアが開くのももどかしく病院に飛び込むと、ナースステーションで居場所を聞き出し、教えられた病室へ急ぐ。

そこに彼女はいた。

白一色の無機質な室内に置かれたベッドの上。

肩口で切りそろえられた艶のある黒髪。整った目鼻立ちに柔らかそうな唇。美しいというより、可愛らしいと言ったほうがしっくりくる、そんな少女。

みさわまい  
三沢舞

いつの間にか一緒にいて、いつからかそれが当たり前になっていた、おれの大切な幼馴染。

## 原点

舞と初めて会った時のことなんて全く覚えてない。

物心ついた時には俺と舞は一緒にいた。

俺の両親と舞の両親は、彼らが中学生のころからの付き合いらしい。

俺達が生まれてからも家族ぐるみの付き合いがあつて、俺達は家族同然に育てられたそうだ。

俺にとって舞はそばにいて当たり前前の存在だった。

小さいころの舞は人見知りが激しく、友達も少なかった。いつも俺の後ろをついて回るようなやつで、俺は手のかかる妹のように感じていたんだと思う。

小学校に上がってもそれは変わらず、クラス内でも孤立しがちだった。

幸い俺はそれなりに社交性があつたようで、友達もたくさんできた。だから、俺はいつも舞の手を引いて舞が孤立しないようにした。それが舞をさらに孤立させてしまうとは思わなかったから。

ある日、学校が終り、帰ろうとした俺は舞の姿がないことに気づいた。鞆がまだあつたから、俺は探すことにした。なかなか見つからず、途方に暮れかけた時、漸く舞を見つけた。



舞に友達ができた喜びかけた時、舞の様子がおかしいことに気づいた。近付いてみると、舞がうつむいて肩を震わせていることが分かった。

舞はいじめられていた。

半ば強引に連れ出して、その日はすぐに帰った。

帰り道で、それまで黙り込んでいた舞が漸く口を開いた。

「たけるくん、ありがとう。」

「きにするなよ、かぞくをまもるのはあたりまえだろ。」

「うん。」

「なにがあつたんだ？」

「うん、えつとね・・・。」

そうして舞は話し始めた。

いつも男子とばかり居ることで悪口を言われていたこと。今日が初めてではないこと。

俺は舞をいじめていた連中以上に、自分自身に腹が立った。今まで気づいてやれなかったことが情けなかった。舞を守ってやれなかつ

たことが悔しかった。

だから、俺は誓った。もう二度と舞を傷つけさせないと。俺が周りに恨まれても、舞を傷つけるものは叩き潰すと。

「まい！まいはおれがまもる。ぜったいだ！」

「うん！」

あの時の舞の嬉しそうな笑顔を俺は忘れない。

成長するにつれて舞にも沢山友達ができた。

中学に上がるころには今の活発で明るい舞になっていて、いじめられることもなくなった。

舞は俺が守ってみせる。

舞には笑っていてほしいから。

これが俺の原点でありアイデンティティー。

それは今も変わることはない。いや、舞が俺のそばにいる限り、これからも変わることはないだろう。

それなのに。

俺は、また、舞を守れなかった・・・！

## 信じてる

「ごめん…。ごめんな、舞。守ってやるって言ったのに、結局何もできなかった…。」

俺が病院に着いてから数時間が経ったが、舞の意識はいまだに戻らない。

医者が言うにはかなり危険な状態らしい。

舞をはねた車はかなりスピードを出していたらしく、即死しなかったのが奇跡的なのだという。心臓は動いてはいるが、一番の問題は脳の損傷なのだそうだ。一命は取り留めたものの、意識が戻るかどうかあやしく、意識が戻っても何らかの後遺症が出る可能性が高いと言っていた。

…なんだよそれ。舞が二度と目覚めない？目覚めても、今まで通りの生活はできない？

ふざけるな！！

俺はそんなの認めない。舞は必ず目覚めるにきまつてる。

見てみるよ。気持ち良さそうに眠ってるだけじゃないか。今すぐにも『うー、おはよー』とか言いながら、いつも通り起き上がるにきまつてる。

大体、朝も昼もあんなに元気だったじゃないか。寝起きは悪い癖に、家を出る時には見てるこっちが疲れるくらい元気で、休み時間だっ

てみんなと騒いでたんだ。あの舞が、こんなことで死ぬわけがないひよつとして、ほんとはもう起きてて、俺を驚かせようとしてるだけかもしれない。

「おゝい、舞。いい加減にしないとほんとに怒るぞ。」

肩を軽くゆすつてみても、目をあける気配はない。

まったく、呑気なもんだよな。こっちはこんなに心配してるってのに、気持ち良さそうに寝やがって。

早く起きろよ。起きて『なんで助けなかったんだー！』って怒れよ。

なあ…、頼むよ。

ガラッ。

扉の開く音で現実に取り戻された。どうやら、舞に文句を言いながらいつの間にか眠っていたらしい。

振り返ると親父がいた。

もうそんな時間なのか。

「詳しいことは楓に聞いた。」

「そう…。」

「猛。今日はそろそろ帰ろう。」

「…いやだ。」

「お前は明日も学校だろう。」

「…学校なんて行ってる余裕ないよ。」

「舞ちゃんが心配なのはわかる。だがな、それでお前が学校休んで、舞ちゃんが喜ぶと思うのか？」

「…いんだ。」

「ん？」

「怖いんだよ。俺が学校行ってる間に、舞になにかあるんじゃないかって。舞が…いなくなるんじゃないかって。」

「猛！そんなこと言うもんじゃない！」

「わかってる！俺だって、舞は絶対よくなるって信じてる！」

「猛…。」

「それに、舞…怖かったと思う。いきなり後ろから撥ねられて、何があったのかも分かってないと思う。そんなの、怖かったにきまつてる。だから、舞の意識が戻った時そばにいて、安心させてやりたいんだ。」

そう、警察の捜査の結果、舞を撥ねた車は、舞の後ろから猛スピー

ドで突っ込んだことが分かった。つまり、舞は自分の身に何が起ったのか理解できないまま意識を失ったんじゃないかってことだ。

「…。」

「それに俺、舞と約束したんだ。舞は俺が守るって。なのに、結局何もできなかった。だから、せめてずっとそばについててやりたいんだ。」

視界が歪む。舞が怖い思いをしてるのに何もしてやれなかった自分に、今こうして、手を握っててやることしかできない自分に嫌気がさす。

きつと今、俺はひどい顔をしているだろう。けどこんなもの、舞の感じた恐怖に比べれば何でもない。だから俺は笑っていよう。舞が目覚めた時に安心できるように。

「はあ…。わかった、好きにしる。だが、そういつたからには最後までやりぬけ。いいな。」

「…ああ、わかってる。ありがとう、父さん。」

「お前の頑固さは美智<sup>みち</sup>譲りだからな。好きにさせたほうがいいことくらいわかってる。」

「母さんほどじゃないと思うけどなあ。」

「ただし、無理はするなよ。それでお前が体調崩したら意味がない。それに、そんなことになれば、俺が舞ちゃんに叱られるからな。」

「…たしかに。」

「じゃあ、俺は帰るからな。何かあったらすぐに連絡しろ。夜中でもかまわん。」

「ああ。おやすみ、父さん。」

ガラッ、バン。

舞、安心しろ。お前が起きるまで、俺がずっといてやるから。

だから、早く起きろよ、舞…。



## さようなら（前書き）

しばらく更新できませんでしたが、きょうから再開します。

さようなら

舞の事故から今日で1週間になる。

その間、舞の容体はほとんど変化がなかった。

目覚めることもなければ、死に至ることもない、完全な停滞。

俺はこの1週間、シャワーを浴びに家に帰る以外はその時間のほぼすべてをこの病室で過ごしていた。

そして昼過ぎのニュースで、舞を撥ねた犯人が逮捕されたことを知った。

正直どうでもよかった。舞をこんな目に遭わせたのは確かに許せないが、犯人が捕まったところで、舞が目覚めるわけではないのだから。犯人の名前だとか人柄だとか、俺には何一つ関係ない。

だから、夕方になって犯人が病院に現れた時も、別にこれといった興味はなかった。

廊下から聞こえる犯人の男の楓さんたちに対する謝罪の言葉を聞きながら、彼の言葉が本心であろうことはよくわかった。だからこそ俺は彼に言いたいことがあった。

扉を開けて廊下へ出る。俺の様子を見て殴られると思ったのか、身を固くした男を見据える。

「あなたを殴って舞が目覚めるのなら、俺はいくらでも殴りましょ

う。ですが、そんなことをしても舞が目覚めるわけじゃない。それどころか、舞がそのことを知ったらアイツが傷つく。舞は、ほんとうに優しいから。だから、俺はあなたを殴りはしません。そして、俺に謝る必要ありません。ただ、祈ってください。舞が目覚めるように、今まで通りの日常過ごせるように、祈ってください。そして、今あなたの中にある謝罪の言葉を、アイツに直接伝えてください。俺があなたに望むのは、それだけです。」

話しているうちに、涙があふれてきた。舞の笑顔が、泣き顔が、怒った顔が、浮かんでは消えていく。今迄にいろんな表情を見てきた。いろんな声を聞いてきた。その表情をもっと見ていたい。あの声をもっと聞いていたい。俺の願いは、ただそれだけだから。

あの後、情けない顔を誰にも見られなくなかった俺は、すぐに舞の病室に逃げ込んだ。

俺が病室に入ってしまったらしくして、犯人の男は警察に連れられて行った。

あれから結構経っているはずだが、それでも誰も入ってこないのは、気を遣ってくれているのだろうか？正直ありがたい。

なあ、舞。お前ほんとにいつになったら起きるんだよ。お前が寝てる間にいろいろあったんだぞ。ってほどもないか。でもさあ、お前がいなくても世界がまったく別のものに見えるんだよ。お前がいなくても世界は静かすぎるんだよな。だからさ、早く戻ってこいよ。みんな待ってるんだからな。

神様でも仏様でも、悪魔だってなんでもいい。

舞を助けてくれよ。

何だってするから。俺が死んだっていいから。

舞にだけは、生きていてほしいんだよ。笑っていてほしいんだよ。

頼むよ…。

カラカラカラ。

ん？誰か来たのか？

いつの間にか寝ちゃってたみたいだ。

「あれ？誰もいない。気のせいかな…。」

「気のせいなんかじゃねーぜー。」

「っ！？」

「よお、こんばんわ。」

振り向いたその先。

開いた窓から差し込む月明かりに照らされて佇む一人の男。

どこから入ってきたんだ！？ここは4階だぞ！？

「おい。聞いてんのか？」

奴の声にはっとした。とっさに奴と舞の間に割り込む。

「誰だ！？」

奴を睨みつける。奴はそれを気にする様子もなく、皮肉気に笑って見せた。

「そう怖い顔すんなって。別に取って食おうってわけじゃねえんだからよ。ああ、俺はヴィンカ、悪魔だ。よろしくな！お前は？」

「あ、相川、猛。…って、悪魔！？」

「そつ、悪魔。」

「そんなもんいるわけないだろ！？」

「おいおい、お前が呼んだんじゃねえか。『神様でも仏様でも、悪魔だっていい』って。せつかく来てやったのにそりゃねえだろ。」

「っ！？本当…なのか？」

「ああ。俺と契約すりゃ、そいつを助けることだってできる。当然、代価は貰っけどな。」

「代価？」

「契約者の魂、つまり命つてのが一般的だな。契約者の願いを叶える代わりに、そいつの一番大切なものを貰う。これが、契約の唯一の条件だ。簡単だろ？」

「ああ、これ以上ないってくらいな。」

「それで、どうする？契約するか？俺の見立てだと、その女、起きねえよ…永遠に。その女が猛、お前にとって一番大切なものを投げ出すだけの価値があるってんなら、俺と契約すりゃあいい。心配すんな、俺は自分に誇りを持つてる。その誇りに誓って、きっちり叶えてやるよ。お前の願いを。」

「…わかった、契約しよう。俺の願いは、『舞が目覚め、笑ってられる』事。そのためなら、俺の命でもなんでもくれてやる。」

皮肉な笑みを消したヴィンカの目を見据えて、言った。

「いいぜ、契約完了だ。」

「ところで、俺の代価は何なんだ？やっぱり…命…なのか？」

「いや、違うな。もっとふさわしいもんがある。」

「…？なんだよ？」

「『記憶』だ。」

「記憶…？」

「お前、その女のためなら死んだっていいと思ってんだろ？なら、

そんな命ならいらねえ。」

ヴィンカはそこで言葉を切り、愉快そうに顔を歪める。

「俺がいただく代価は、その女の持つお前の記憶だ。その女に忘れ去られたら、お前はどうなるんだろうなあ？」

「なっ!？」

アイツが、舞が俺を忘れる？今までずっと一緒だったあいつの中から、俺がいなくなる？

…でも、それで舞が助かるんなら…。

「…それで、舞が助かるんだな？」

「ああ、約束する。まあ、それがいやだってんなら、今から契約を破棄することだってできるぜ？そのときはあの女が死ぬだけだ。」

舞が死ぬか、舞が俺を忘れるか、か…。そんなの、悩むまでもないだろうが。

「いや、その必要はない。頼む。」

「そうか。なら、そうさせてもらっぜ？」

ヴィンカがそう言って舞の額に右手をかざすと、ヴィンカの右手が淡く光り、すぐに消えた。

「これでいいはずだ。ああ、一つ言い忘れた。お前、あんまりこい

つにあわねえ方がいいぞ。」

「…??どういうことだ?」

「俺さあ、あんまこーゆうの慣れてねえんだわ。だから、下手にお前に会うと何が起こるかわかんねえ。どうせこいつもお前のこと覚えてねえんだしよ、お前もこいつのこと忘れちまえよ。そうすりゃ、お前も苦しまずに済むだろうしな。」

俺が苦しいだけなら俺が耐えればいい。でも、俺が近くにいると、舞がどうなるか分からない。

だったら、俺は舞から離れたほうがいいんじゃないか?

「まあ、まだ目が覚めるまでもう少し時間がある。その間に考えとけよ。じゃあな。」

そう言つて、ヴィン力は窓から飛び出して行つた。

…舞から離れる、か。そのほうがいいんだよな。

「舞、ごめんな。俺にできるのはここまでみたいだ。約束…したのにな。守つてやるって言つたのにな…。ごめん。…舞、今までありがとう。さよなら…。」

病室を出るところまでが限界だった。涙がこらえきれない。

こんなところで泣いてたら邪魔だよな。



…帰ろう。

「猛君？」

あゝあ、楓さんに見つかっちゃたか…。まあいいや、楓さんには言っておくか。

「楓さん。そろそろ、舞が起きると思います。ついててあげてください。」

「猛君はどうするの？」

「俺はいいんです。もう、舞の中に俺はいませんから…。それから、舞の前で俺の名前は出さないでください。」

「ちょ、ちょっと！何言ってるの！？」

「お願いします！」

もう耐えられなかった。

楓さんの制止の声を振り切って、俺は病院を飛び出した。

舞、今までありがとう。そして、さようなら…。

## さようなら（後書き）

今回の投稿分を含めてあと4話ほどで完結になると思います。  
評価、感想等お待ちしております。

君は何処に？

あの日以来病院には行っていない。

両親の話では、やはり舞は俺のことを何一つ覚えていないらしい。

両親のことは覚えているものの、舞の口から俺の存在を示す言葉は出ていないようだ。

ヴィンカの言う通り、俺に関する記憶だけがきれいさっぱり消え失せたのだろう。

もちろん俺はそれを嘆くつもりは毛頭ない。

父さんは、

『つらくないのか？』

と聞いてきたが、つらくないわけがない。

だが、舞の意識が戻ったのならそれでいい。

そう伝えると何か言いたそうにしていたが、結局何も言わずにいてくれた。

舞の事故から二週間、つまり、舞の病室に行かなくなって一週間が経った。

俺の生活は、舞がないということ以外は概ね以前のものに戻った。

『概ね』ということは当然例外もあるわけで。

その例外たるモノが今、目の前に在る。いや、居ると言っただろうが、いいのだろうか？

「で？お前はいつまで俺に憑いて回るつもりだ？」

高校から帰る途中、視線を前に向けたままソレに話しかける。

「気にすんなって。まあ、なんつーか…そう、あれだ、アフターケアってやつだ。」

「アフターケア？」

「そ、アフターケア。この間も言っただろ？あーゆーの慣れてないって。それで何かあったら俺がヤバいわけよ。またあの死神ヤローに捕まったらと思うと…、ああ…考えただけでゾッとするぜ…。」

ヴィンカはそう言って、自分の肩を抱いて震えはじめた。

まあ、確かに、ヴィンカが俺に迷惑をかけているわけではないのだが、悪魔に憑き纏われるのはあまりいい気がしない。

「そーいえばよー、あの舞って女、きょう退院だったな。」

なんで急にそんなことを言い出すんだ？アフターケアってことはもうしばらく様子を見たほうがいいんじゃないだろうか。

「そうらしいな。それがどうかしたのか？」

「気になんねーのかよ？」

「俺が気にしたって仕方ないだろ。俺はあいつに関わらない方が良  
いんだろ？」

「まあ、そうなんだけどよ…。」

なんだって言うんだ？こいつにしてはやけに齒切れが悪いな。

まあ、こいつにはこいつの事情があるんだろうし、俺が気にするこ  
とじゃないか。

そんなことを考えていると、いつの間にか家のすぐ近くまで来てい  
た。

そう言えば、今日は珍しく母さんが家に居るって言ってたっけ。ヴ  
インカはベランダから部屋に入らせないと。

「おい、ヴィン」猛、あれ、お前のお袋さんじゃねーか？」ん？あ、  
ほんとだ。どうしたんだろ？」

ヴィンカに言われて見てみると、母さんがひどく慌てた様子で家か  
ら飛び出したところだった。

「母さん、なにかあったの？」

駆け寄って声をかけると、母さんに肩を掴まれた。ちよつと、いや、

かなり痛い。

「猛！、舞ちゃんが、舞ちゃんが！」

「か、母さん！ちょ、落ち着いて！」

両手で母さんの肩を掴んで引きはがす。相手を落ち着かせるには、まず自分が落ち着いて話しかけるのが手っ取り早い。

「母さん、落ち着いて。」

数度深呼吸をして、落ち着きを取り戻したところで声をかける。

「落ち着いた？」

「ええ、大丈夫。落ち着いたわ。」

その言葉を確認して手を放す。

「それで、何があつたの？舞がどうとかって…。」

「猛、落ち着いて聞きなさい。…舞ちゃんが、病室からいなくなつたわ。」

舞がいなくなつた？どういうことだ？今日は一日、楓さんが付いてるはずじゃ…？

「楓ちゃんが退院の手続きのために十分くらい病室を離れたらしいの。それで、楓ちゃんが病室に戻った時にはもう…。」

「そうか…わかった、俺も探す。舞の恰好は？」

すぐにでも走りだしたい衝動をこらえて、今までに分かっていることを聞き出す。

かあさんによると、退院の準備はほぼ終わっていて、手続きが終われば、あとはもう出るだけだったらしい。当然、私服に着替えた後だ。私服となると、人ごみの中から探し出すのは困難になる。

警察への連絡は済んでいるらしいから、俺達は心当たりのある場所を探すべきだろう。

母さんにそう伝えると、踵を返して駆けだしていった。

俺も、母さんと逆方向に走り出しながら、携帯を取り出し友人に片っ端から連絡する。

ある程度の人数を確保し携帯をポケットに挟み込んだところで、ヴィンカが声をかけてきた。

「お前、結構冷静だなー。てっきり何も考えずに走り回るんだと思ってたぜ。」

「ああ、俺も自分で信じられなくらい落ち着いてる。人間、驚きすぎると逆に冷静になるってのは本当かもな。」

そんな軽口を叩きながらも決して足を止めることなく、思いついた場所を回っていく。

探し始めてからどのくらい時間が経っただろうか。

思いつく限りの場所はすべて回ったはずだ。

しかし、いくら探しても舞の姿はない。

「クソッ！どこにいるんだ！？」

まさか、行き違いになったのか？いや、連絡を入れた友人の数を考えれば、仮にそうだったとしてもそろそろ見つかるはずだ。じゃあ、まだ探してないところに居るのか？思い出せ、あとアイツがいきそうな所はどこだ？

「おーい、猛ー。」

「うるさい！少し黙ってろ！」

「ちょっと落ち着けてー。さっきお前が言ったことじゃねーか。」

そうだ、焦ったところでどうなるわけでもない。

「あ、ああ、そう…だな。」

「それでよー、猛。今までお前が行ったところって、他の奴も知ってるところなのか？」

「ああ、他の奴も知ってると思う。それがどうかしたのか？」

「じゃあさ、お前とあの舞って女しか知らないところってねーのか



？」

何言ってるんだ？舞は俺のことなんか覚えてないんだから、そんなところにいるわけないだろ。

「今はそんなの関係ないだろ。」

「いや、さっきも言っただろう？代価として特定の記憶だけ消すつてのに慣れてねーって。」

「それがどうかしたのか？」

「だからよー、ひょっとしたら消し損ねた記憶があるかもしれないんだ。まあ、お前のことは覚えちゃいねーんだろ？が、お前とあの女は幼馴染ってやつなんだろ？だったら、その場所だけが記憶に残ってるってこともあるんじゃないかなーってさ。」

「なるほど…。」

俺の記憶がないから全く考えてなかったけど、そういうこともあるかもしれない。

俺と舞しか知らない場所、か…。

俺達が初めて会った場所？

それはないか。そんなもの覚えちゃいないし、大方どっちかの家だろ。

じゃあどこだ…？

記憶に残るような出来事があった、俺達しか知らない……！？

まさか…！

「あそこか！？」

「お、おい！？猛、どこかわかったのか！？」

突然走り出した俺の後ろを走りながら、ヴィンカが叫んでいる。

「わからない。でも、あそこくらいしか思いつかない！」

記憶に残るような出来事があった、俺と舞しか知らない場所。

その二つの条件に当てはまるような場所なんて、俺には一ヶ所しか思いつかない。

三年前、中学二年の冬に、舞を始めて連れていったあの場所だけだ。

## 思い出の場所

あの日のことは今でもよく覚えている。

十数年ぶりの大寒波がどうかで、俺の短い人生の中で一番寒い冬だった。

朝から雪が降り続いていて、学校から帰った俺は早めに風呂に入って冷えた体を温めることにした。

風呂から上がって風呂上りの牛乳を飲もうと冷蔵庫を開けると、いつも入っているはずの牛乳がなかった。

仕方なくコンビニに買いに行こうかと、コートを羽織って外に出た俺は、何となくいつも行く近所のコンビニではなく、少し離れたところにある別のコンビニへ行くことにした。

その途中、舞が走っていくのを見つけた。

一緒に帰ったはずの舞が、何故、こんなところに居るのか不思議に思ったが、舞の様子がおかしいことに気付き、すぐにあとを追った。

俺が舞の腕をつかんだ時、舞は泣いていた。

俺は焦った。舞が泣くところなんて、小学校の低学年以来見ていなかったから。

舞は、腕をつかんだのが俺だとわかると、俺の胸に顔を押し付けてそれまで以上に泣き出してしまった。

舞が泣いている理由は気になったが、泣き止ませるのが先決だと考えた俺は、舞の頭を撫でながら泣き止むのを待つことにした。

その時携帯が鳴った。相手は母さん。

母さんから、舞が親と喧嘩して家を飛び出したと聞いた俺は、今舞といることを告げて電話を切った。

結局舞が泣きやんだのは、それから約十分後のことで、俺はその間、周囲からの痛い視線に耐え続けなければならなかった。

泣きやんだ舞を連れて近くの公園に行き、ベンチに座らせて話を聞く。

そこでようやく喧嘩の理由を知ることができた。

舞の話 요약するとこうなる。

来年の冬、俺達は高校受験をすることになる。

舞は成績が良く、このあたりで最もレベルの高い進学校も十分狙えるらしい。

舞の両親もそこへ進学することを望んでいる。

しかし、舞はそれを拒否した。

それがきつかけとなり、大喧嘩。

そして、舞は家を飛び出した。

「なるほどな。で？舞はどこに行きたいんだ？」

「え…？」

「え、じゃないだろ。舞がそんなに意地になるくらいだ、他に行きたい所があるんだろ？」

「それは…。」

「それは？」

舞の口から出たのは家の近くにある別の高校の名前。俺が行くつもりの高校で、レベルは中の上。部活が強いわけでもない、どこにもあるようなごく普通の高校だ。舞がこだわる理由が分からない。

「なんでそこがいいんだ？俺が言うのもなんだが、レベルを下げてまで行くようなところじゃないだろ？」

「猛が……から。」

「ん？俺がどうかしたか？」

「猛が行くから！！」

「へ…？」

なんでそこで俺の名前が出てくるんだ？さっぱりわからん。

「どういうこと？」

「う、それは…そ、そうよ、猛が言ったんじゃない！」

「俺なんか言ってたっけ？」

「守ってくれるって、言ったじゃない…。」

耳を疑った。七年も前の、それも俺が一方的に宣言しただけの約束とも言えないものを、舞が覚えているとは思っていなかったから。

そして気づいた。今回の三沢家の喧嘩の原因が俺だったということに。

「理由は本当にそれだけか？」

「…そうよ。どうせくだらない理由よ。」

そう言っただけで俯いてしまった。

「別にくだらないなんて言っていないだろ？それどころか、嬉しかったくらいだ。舞があれを覚えてたことが。…それに、理由がそれだ

けならいい方法も思いついたしな。」

「いい方法？」

「あの約束を守るためには、俺と舞が同じ高校に行った方がいいんだろ？だったらそうすればいい。」

「そんなことわかってるわよ。だから私が猛と同じ高校に行けば…。」

「だからそうじゃない。逆だ、逆。」

「逆？」

「そう。舞が俺と同じ高校に行くんじゃないで、俺が舞と同じ高校に行けばいい。ほら、簡単じゃないか。」

「…猛。自分で何言ってるかわかってる？あと一年しかないのよ？そんなこと…。」

「出来るわけないってか？」

舞は微かに頷いた。まあ、そうだろうな。普通はそう思う。

「でも、やってみなきゃわからないだろ？それに、俺が約束破ったこと、あったか？」

俺が立ち上がってそう言っていると、考え込む舞。そんなに考え込まれると、ちょっと自信がなくなってくる。

しばらくして、首を横に振った。

「だろ？できれば考え込んでほしくなかったけど。」

そう言うと舞は俯いて、小さく「ごめん。」と言った。

「まあ、いいけど。」

そこでいいことを思いついた。確かこの近くだったはずだ。

「舞、ちょっとついてきて。」

舞がベンチから立ち上がるのを確認して公園の出口へ向かった。

公園を出て歩くこと十数分。俺達は今、街外れの高台に向かう道を歩いている。

母さんには少し帰りが遅くなると連絡を入れたから大丈夫だろう。  
…多分。

高台の公園の少し手前で脇道に入る。

「ねえ、どこに行くのよ。」

もう何度目かになる舞からの質問に「いいから。」と答えながら歩き続ける。

しばらく歩くと開けた場所に出た。



ここが、父さんに終えてもらった、父さんと母さんの思い出の場所。

「すごい…。」

「だろ？」

ここからは俺達の住む街が一望できる。

近くに公園があるため人はあまり来ないが、眺めは公園よりも数段いい。

「ここはさ、父さんと母さんの思い出の場所らしい。」

街の明かりに目を奪われていた舞は、不思議そうな顔をして俺を見た。

まあ、これだけじゃわからないよな。

「で、父さんがこの場所を教えてくれた時、一つ条件を付けたんだ。」

「条件？」

「『父さんと母さんはここでいろんな約束をして、それを全部守ってきた。だから、ここですた約束は必ず果たされるんだ。お前に何があっても果たしたい約束ができた時はここを使え。ただし、その約束は何があっても守り抜け。』ってな。まあ、験担ぎだな。」

舞は、俺が何を言いたいのかまだ分からないらしい。こいつ結構鈍

いな。

「舞、約束する。一年後、俺はお前と同じ高校を受けて、必ず合格してみせる。」

俺がそう言っても、舞からは何の反応もない。

声をかけようと口を開きかけたところで、初めて舞に変化が現れた。目が潤みはじめ、次第に涙が溜まっていく。

その涙が溢れる直前、舞は俺に抱きついてきた。

「お、おい！」

「約束…だからね…。破ったら許さないから！」

そう言つて涙を浮かべながら笑う舞の笑顔は、今まで見た中でいちばん綺麗に見えて、「あ、ああ。」と返事だか呻き声だかわからないような情けない声しか出せなかった。

その後、沢山の参考書を買って込んで片っ端から解きまくったり、先生に教えを乞うなど、思いつく限りのことをやった結果、何とか舞との約束を守ることができた。

あれから三年。

舞をあの場所へ連れて行ったことは誰も知らないはずだ。

だから、まだ見つかっていない以上、あの場所に居る可能性が高い。

そして彼女は、そこにいた。

君さえいれば？

彼女 舞は、あの日と同じように眼下に広がる俺たちの街を眺めていた。

あの日と違うのは、いまが夕暮れ時だということくらい。

けれど、夕日に照らされた舞の姿は酷く幻想的で、あの日、街の明かりに目を奪われていた舞とはかけ離れていて……。

相川猛は二度と、三沢舞の隣に立つことはできないのだと突きつけられた気がした。

できることなら、今すぐこの場所から逃げ出したかった。

夕日に目を細める舞に背を向けて、他の誰かに舞を任せて、すべてを放棄してしまいたかった。

それでも、逃げるわけにはいかない。

舞にこの場所を教えたのは俺だ。だから、ここで舞を連れ戻すことが、俺に残された最後の責任なのだろう。

ここまで走ってきたことで荒くなってしまった呼吸を整え、すべての感情を押し殺して、俺は彼女に声をかけた。

「おい、あんだ。」

俺の声に振り向いた彼女に問いかける。

「こんなところで何してるんだ？」

しばらく黙りこんだ後、彼女は躊躇いがちに口を開いた。

「…ねえ、キミは…よくここに来るの？」

「質問に質問で返すなよ。別にいいけど。ここには今日始めてきた。」

「そう…。」

「で、あんたは何してたんだ？」

最初と同じ質問を投げかけると、彼女は街の景色を見渡しながら言っ  
た。

「別に何も。私も今日はじめてきたはずなんだけど、なんだか懐かしい気がしてさ。ここで何か大切なことがあった気がするんだけど、思い出せないんだよね。」

決意が揺らぎそうになるのを必死で押さえながら適当に相槌を打つ。

「ねえ、キミ、何か知らない？」

「俺が知るわけないだろ。今日はじめてあって、名前も知らないんだぞ？」

「そう…だよ。変なこと聞いてごめんね。」

そう言っただけ黙りこんでしまった。

コイツを連れ戻さなきゃならないのに、このままじゃ埒が明かない。

「なあ…あんた、名前なんて言うんだ？」

「え…？」

「だから、あんたの名前だよ。名前聞けばなんかわかるかもしれないし。」

「あ…うん、私の名前は舞。三沢舞。」

よし、もう一息だな。

「三沢…舞？ああ、そういえば、ここに来る途中であんたのこと探してる連中見たけど、あれはいいのか？」

「あ！そうだった！」

完全に忘れてたみたいだな。こいつらしい。

「ごめん！私行かなきゃ。」

「待てよ、一緒に行つてやる。あんたを探してる連中のなかに俺の知り合いがいたんだ。ここから帰る途中で何かあったら、俺がヤバい。」

「……。」

また考え込みしまった。いったいどうしたんだ？

「…ねえ、ほんとに初対面？なんか、キミみたいな人を知ってる気がするんだけど…。」

やば、まずったか…？

「気のせいじゃねえの？…ほら、行くぞ。」

それだけ言って歩き出す。

これ以上墓穴を掘るわけにはいかない。

それに、これ以上こいつと会話するのはさすがにつらい。さっさと終わらせてしまおう。

気付かれないように母さんに連絡を入れ、ついてきているか確認もせず先へ進む。

一刻も早く、この苦しみから解放されるために。

不自然にならないように道を聞き出し、三沢の家に向かう。

途中何度か名前を聞かれたが、その度にはぐらかした。

目的地に着くと、そこには四人の人物がいた。俺の両親と、三沢の

両親だ。

ここまでくれば、俺の仕事は終わりだ。

「じゃあな。」

とだけ言い残し、その場を立ち去る。

「待つて！」

が、思わず立ち止まってしまった。はあ、慣れっつてのは恐ろしい。

自分の反応に苦笑していると、予想通りの言葉が聞こえた。

「私、キミと会ったことあるよね？」

答えは決まっている。

「気のせいだ。」

「じゃあ、どうして名前を覚えてくれないの？初対面なら何も問題ないじゃない！？」

そうだな…。初対面ならよかったのにな。

「あんたに名前を教えるつもりはない。」

そう言って歩き出す。

後ろで何か叫んでいるが、もう立ち止まるわけにはいかない。今度



こそ本当にさよならだ。

下手をすれば、アイツの身に何が起こるか分からない。ヴィンカの言うことが正しければ、俺が自分から名乗るのが一番危険だろうから。

そういえば、ヴィンカの奴はどこに行ったんだ？途中から姿が見えないが。

まあいいか。いなくなっただってことは、居る必要がなくなっただってことだろうから。

だったら名乗ってもいいんじゃないかって？

冗談じゃない。

確かに俺がアイツから離れたのはヴィンカに言われたからだ。だけど、今日の一件でよくわかった。

俺のことを何も覚えちゃいないアイツの隣にすることが、どれだけ苦しいのかってことが。

そこまで考えた時、それまで以上の大声が響いた。

「約束破るつもり！？」

耳を疑った。

ヴィンカは言っていた。

『お前のことは覚えてないだろうが、場所だけが記憶に残ってるかもしれない』と。

確かに、アイツはあの場所を覚えていた。

でも、アイツが『約束』なんて覚えているはずがない。

まさか…、記憶が戻ったのか!?

微かな希望とともに振り返る。

しかし、アイツの顔を見た瞬間、希望は砕けて消えた。

アイツは、自分が何を言っているのかわからないような顔をしていたから。

やっぱりそんな都合のいいことはないか…。

結局、奇跡なんてものは存在しないんだな…。

再び背を向けた時、視線の先にはヴィンカがいた。

驚いたような顔をしていたが、俺と目が合つと、初めて会った時のような皮肉気な笑みを浮かべた。

いきなり出てきたと思つたら、俺が絶望するのを見て楽しんでやがっただけだよ。

やっぱりあの野郎は悪魔だ。

あのときみたいに右手が光っていたような気もするが、そんなことはどうでもいい。

もう、俺には関係ないことだ。

そう思い、もう一度歩き出そうと足を上げた時、体に衝撃が走った。

やっぱりあの野郎やりやがったのか。

まあ、このまま苦しみを抱えて生きるよりも、死んだ方がましか。

そんなことをぼんやりと考えながら意識が途切れるのを待ったが、一向にその時はやってこない。

不思議に思っていると、ある事に気づいた。

後ろから誰かが抱きついていて。しかも震えている？

「い……なれ……。め……。せい。いめ……。なれ……。いめんなれ。いめんなさい。」

聞き間違えようがない。間違いなくアイツの、舞の声だ。でもどうして？

「ごめんなさい。ごめんなさい。謝るから、何でもするから。だから、私の前から消えないで…。」

「ちょ、落ち着けよ。お前、どうしたんだよ？」

「思い出したの、全部思い出したの…。」

「なっ！？ほ、本当…なのか？」

「うん…だから、だからあ…。」

でも、なんで？舞の記憶が突然戻るなんて。

っ！？まさか！？

視線を正面に戻すと、さっきと同じ場所にヴィンカが立っていた。

今まで見たことのなかった穏やかな笑みを浮かべて。

あ、目、逸らしゃがった。

以外とお人好しだったんだ。

まあ、せっかくの好意だ、ありがたく貰っとくかな。

後ろから抱きついていて舞をさりげなく引きはがして向かい合う。

舞は叱られることに怯える子供のように俺を見ている。

「舞、そんなに心配しなくても、どこにも行ったりしないさ。でも、お前に忘れられたのはかなりつらかったんだからな？頼むから、もう忘れないでくれよ？」

俺がそう言つと、舞はすごい勢いで頷いた。

「じゃあ、もう一度だな。」

あの時は、アイツが生きてればそれだけでいいと本気で思ってた。そんなのは撤回してやる。

大切な人に忘れ去られるってことは、その人が死んでしまうのと同じくらいつらくて、苦しくて、悲しいものなんだ。

ようやく気付いた本当の気持ち。

今なら言える。

「舞、約束する。この先何があっても、俺がお前を守ってみせる。」

俺は舞が好きだ。

「猛。それってプロポーズ？」

.....。

「「なっ!？」」

ハモッた。

「あらあら、相性ピッタリ」

舞は耳まで真っ赤になってしまった。

たぶん俺も似たようなもんだろうけど。

「か、母さん！」

母さんを睨みつけると、親連中四人＋一がニヤニヤしていた。

ヴィンカ、お前もか!？

その後、散々からかわれたのは言うまでもない。

ああー！せっかく格好良く決めようと思ったのにー！

君さえいれば？（後書き）

次回の投稿で完結となります。

次回作以降の参考にしたいと思いますので、感想等頂ければ有り難いです。



## エピソードぐ君とともに（前書き）

何とか完結させることができました！  
今回は前回に続き、若干コメディ風味になっております。

## エピソード―君とともに―

思い出したくもない、俺の恥ずかしい宣言の後、俺と舞は付き合うことになった。

あとで聞いた話だが、あの時舞の記憶が戻ったのは、ヴィンカのお人好しだけが理由だったわけではないらしい。

ヴィンカは、舞の記憶を消す時、一つの誓いを立てていたそうだ。

その誓いというのが、

『もしも舞が、自分の力だけで一部でも記憶を取り戻したときは、すべての記憶を返還する。』

というものだったらしい。

そして、あの場所の記憶も故意に残したのだという。

というのも、かつてある死神に負け、見逃してもらった代わりに義務付けられたそうだ。

結局、自業自得じゃないか。

それでも、記憶を取り戻したのは舞だけだったらしいが。

つまり、悪魔であっても俺達の邪魔はできなかったというわけだ。

俺たちの愛の力をなめんなよ!?

すいません！調子のつてました！

だからそんな冷たい目で見ないでええええええええええ！

さて、冗談はこのくらいにして、近況報告と行きますか。

舞が事故に遭ってから約五年が経った。

プロポーズじみた事を言ってしまった手前、中途半端なことでは  
 できず、必死に努力した結果、それなりに有名な大学に入ることが  
 できた。

そして、内定をもらい、卒業を目前に控えた冬の日。

俺は一世一代の大勝負に挑むことにした。

なにかつて？

プロポーズに決まってるじゃないか！

確かに似たようなことはしましたけどね、こういうことはきっちりしないと、と思うわけですよ。

というわけで、俺は今あの場所にいる。

やっぱ新しく始めるにはここだよな。

「おーい、タケルー。そろそろ時間だぜー。」

ああ、そうそう、ヴィンカの奴は相変わらず俺に憑いている。

どうやら俺と舞はこいつに気に入られてしまったらしい。

あのころは知らなかったが、こいつは人の目に見えなくなることができるらしく、契約した俺と、記憶のやり取りをした舞以外には見えなくなっている。

「おーい、聞いてんのかー。」

「ああ、聞いてるよ。」

さて、そろそろ行きますか。

「ヴィンカ、舞を連れてきてくれ。」

「オッケー。」

舞はヴィンカに任せとけば安心だし、あとは待つだけだな。

街の明かりを眺めながらしばらく待っていると、ヴィンカと舞がやってきた。

俺の隣に舞が立ち、その少し後ろにヴィンカが控える。

この五年間変わらなかった俺達三人の関係。

それに今、わずかな変化を与える。

あー、緊張してきた…。

「舞、あのさ、そのー…。」

ちらりと舞を見ると、わずかに首を傾げて、いつも通りの笑顔で俺を見ている。

ヴィンカは必死に笑いをこらえているであろうことが手に取るように分かる。

…なんだ、緊張してんの俺だけかよ。

あー！もういい！

どうせ格好良くなんてできないんだ。

だったらいつもどおりでいいじゃないか！

「舞、約束する。これから先何があっても、俺がお前を守ってみせる。だから、これからもよろしく。結婚しよう。」

……………。

…ん？なんだ、この空気は？俺なんかまずった？

「猛、違うよ。」

へ…？

「猛が守るのは私だけじゃないよ。この子も守ってよね？」

舞はそう言って、いつくしむように自分のおなかを撫でた。

「え…、それって、もしかして…。」

「三か月、だって。」

まじかよ！？

すげー、うれしい！

「そっか！なら、お前たち、だな！」

「おーい、俺も忘れんなよー！」

「「ヴァインカは黙ってる（て）。」」

「「うわー、ひっでー！」」

こんなやり取りをしながらも、三人とも笑っている。

こんな毎日が続いてくれればそれでいい。

ヴィンカと、

これから生まれてくる子供と、

そして舞、

君とともに。

## エピソード君とともに（後書き）

処女作でしたが、何とか完結させることができました。  
楽しんでいただけたなら幸いです。

ありきたりなうえに、文章、内容含めておかしなところが多々あったと思います。

ご指摘等ありましたら感想を頂けるとありがたいです。

今後とも我が拙作をよろしくお願い致します。

それでは、またお会いする日まで…。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1384d/>

---

君さえいれば

2010年12月10日02時32分発行